

6/9(火)「チャペルアワー」

奨励者:松谷信司さん(キリスト新聞社 代表取締役社長)

聖書:「新約聖書、ルカによる福音書 18章 9-14節」

チャペル奨励者にキリスト新聞社社長の松谷信司さんをお招きしました。松谷さんは2024年度から3年連続でチャペルにお招きしています。松谷さんの奨励は、「推し活」・「聖地巡礼」・「黒歴史」といった現代風の言い回しを使って、サラリと語られます。しかしその内容は、あこがれの対象に近づきたいと熱望する気持や、各個人が持つぬぐい去りたい記憶など、人の感情の奥底に触れるシリアスなものです。そんな深刻な問題を、今の学生目線に合わせて興味深く語ります。今回の題は「神キャンセル界限」、神の愛について非常に興味深く語っていただきました。

【近年、自分自身の学力や外見、身なりなど、いろいろなものを向上させるべく、自分磨きを推奨する情報が多数目につきます。それらからは、あたかも「今のままのあなたはダメだ、自らをアップデートせよ」と、強力なメッセージとして煽られているように感じることがあります。確かに、自ら進んで研鑽するのは素晴らしいことかもしれません。しかし、自分を磨いた先のゴールはどこにあるのでしょうか。また、その成果や価値を判定する主体は、いったいどこにあるのでしょうか。

聖書に語られる、「ファリサイ派」と「徴税人」との比較を例に考えてみましょう。「ファリサイ派」とはいわば宗教エリートの集団です。彼らは律法を順守することを優先するあまり、本来の宗教的な真理を越え、独善的になっています。そして彼らは、他者に向けて自分たちのルールを押し付け、自らが神のようなふるまいをしてしまう集団として語られます。そのためイエスとは対立し、しばしば論争になります。今日のタイトルに照らし合わせるなら、神をキャンセルした人たちと言えるでしょう。

「徴税人」とは、その仕事ゆえ人々から嫌がられ、避けられている存在です。しかし、自らの罪を認め、どうすればその罪が許されるのかを考え続ける存在として語られています。そしてイエスは彼らと共に食卓を囲み、彼らもまたイエスの教えに従い、行動を共にします。神を信頼し、絶対的に肯定をするのです。

これらを、昨今の流行りに照らし合わせると、「ファリサイ派」は「プライドや承認欲求が強く、自分のためにだけに自分を磨く人」です。その本質は、他者をさげすみ、自分の方が上であると決めつける自己満足の人物と言えるでしょう。それに対し「徴税人」は、自らが罪深い存在であることを認識しています。救われるために、大いなる神の力にすがり、正しい道を追い求めようとする真の求道者」と捉えることが出来るのではないのでしょうか。】

最後に松谷さんは語りました。【キリスト教の「神の愛」に条件はありません。「ルールを守るから救われる」とか、「学力が高いから偉い」といった、「〇〇だから・・・」という前提条件無しに、すべての民に等しく与えられるものです。だから、誰かと比較をして、足りていない自分を嘆いたり、一喜一憂する必要は無いのです。人は「神に愛されるために生きる」のではなく、「神に愛されている者として生きる」のです。】

極めて印象的なフレーズでしめくられました。人は弱い存在です、誰しものが、他者の視線や発言は気になってしまいます。今日の奨励は、何を基準として生きるのか、物事の本質はどこにあるのか、など人生の根本を考えるキッカケとなりました。流行の言い回しと、時節に応じたスライドで、出席者も思わず引き込まれるチャペル・アワーとなりました。松谷さん、今回も貴重なお話をありがとうございました。